

後腹膜 Venous aneurysm の 1 例

国立大阪病院泌尿器科 (医長 高羽 津)

辻村 晃, 西村 憲二, 松宮 清美
岡 聖次, 高羽 津

国立大阪病院病理部 (部長 : 倉田明彦)

有馬 良一, 倉田 明彦

A CASE OF RETROPERITONEAL VENOUS ANEURYSM

Akira Tsujimura, Kenji Nishimura, Kiyomi Matsumiya,
Toshitsugu Oka and Minato Takaha

From the Department of Urology, Osaka National Hospital

Ryoichi Arima and Akihiko Kurata

From the Department of Pathology, Osaka National Hospital

A case of retroperitoneal venous aneurysm is reported. A 73-year-old woman was referred to us with the chief complaint of left abdominal mass. A giant abdominal mass was palpable and diagnostic imaging examination including ultrasound tomography, excretory pyelography, computed tomography, magnetic resonance imaging and angiography revealed a giant cystic mass encircled by calcification in the left retroperitoneal space. Operation for this cystic mass was performed under the preoperative diagnosis of a giant left renal cyst. During operation the mass was located between the left kidney and the left adrenal gland. Because it was difficult to separate the mass from the left kidney the mass was removed with the left kidney. The extirpated tumor measured 15.5×15.0×9.5 cm and contained old blood clots and red-yellow colored fluid. A histological examination revealed that the tumor wall was composed of smooth muscle and elastic fibers. Therefore, pathological diagnosis was retroperitoneal venous aneurysm.

Retroperitoneal venous aneurysm is very rare. To our knowledge, this is the 8th case of retroperitoneal venous aneurysm reported in Japan.

(Acta Urol. Jpn. 38: 1037-1040, 1992)

Key words: Retroperitoneal venous aneurysm

緒 言

後腹膜腔に発生する嚢胞性疾患にはさまざまなものがあり、一般に内部に変性血液成分を有する嚢胞とされている血液嚢胞はその一つである。今回われわれは病理組織学的に後腹膜 venous aneurysm と診断された 1 例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：73歳，女性

主訴：左腹部腫瘍

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：数年前より高血圧のため内服治療中であった。腹部外傷の既往はない。

現病歴：1990年6月頃より左腹部痛がしばしば出現，その後左腹部腫瘍を自覚し当院外科を受診。脾腫の疑いで外科入院精査中，血管造影検査で腫瘍は巨大左腎嚢胞と診断され1991年2月当科へ紹介された。

当科入院時現症：血圧 138/70 mmHg，脈拍 72/min 整。左季肋部から臍下にかけてほぼ正中まで達する腫瘍を触知した。腫瘍は硬く可動性は認められなかった。

入院時検査成績：RBC $373 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，Hb 11.6 g/dl，Ht 33.8% と軽度の貧血とアミラーゼ値 456(130～400) U/L と軽度の上昇以外に特に異常は認めず。

AFP, CEA など腫瘍マーカーは正常範囲内. 検尿にも異常所見なく尿細胞診は陰性.

X線学的検査: 排泄性尿路造影検査では左腹部に第11胸椎から第4腰椎にかけてほぼ正中に達する 15.5×13.3 cm 大, 楕円形, 辺縁に石灰化陰影を伴う巨大腫瘍を下方へ偏位した左腎上極部に認めた (Fig. 1). 超音波検査では辺縁から内腔へ突出した不整形の hyperechoic な部分と内部に液体が貯留しているように描出された hypoechoic な部分が混在する腫瘍を示した. CT 検査では左後腹膜腔に最大径 14.0 cm の円形の腫瘍を認め, 周囲には石灰化陰影を伴い内部は全体的には low density だが一部不均一な high density 部分も認める cystic pattern を呈し, 造影剤ではほとんど enhance を示さなかった (Fig. 2). MRI 検査では T1 強調にて下方へ圧排された左腎上極部に白く描出される円形の腫瘍を認めた. 血管造影検査では MRI 同様, 下方へ圧排された左腎上極に直径約 14 cm 大の円形の hypovascular な腫瘍を認めた. 脾臓は上方へ圧排され, 腹部大動脈は右方へ偏位していた.

以上の検査より周囲に石灰化を伴った巨大な左腎嚢胞と診断し1991年2月18日手術を施行した.

手術所見: 左第10肋骨切除を伴う斜切開により経胸腰的に左後腹膜腔に達した. 巨大な腫瘍は左腎の上方に存在し, 腫瘍の上極外側に扁平化した左副腎が付着

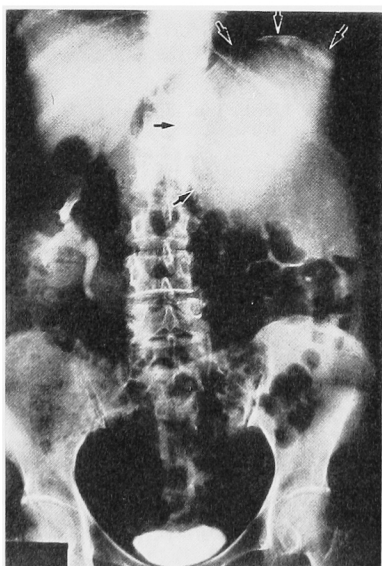


Fig. 1. Excretory pyelography reveals caudal shift of the left kidney and giant round mass at the upper part of the left kidney (arrow).

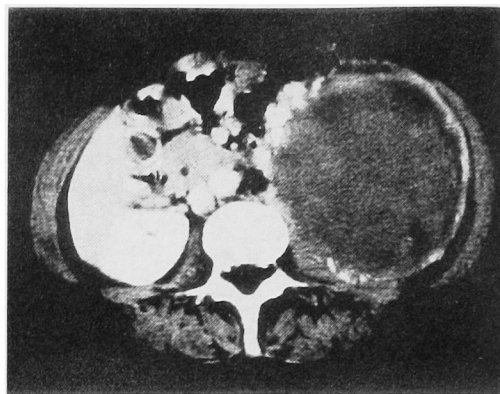


Fig. 2. CT scan reveals a giant low density mass encircled by calcification.

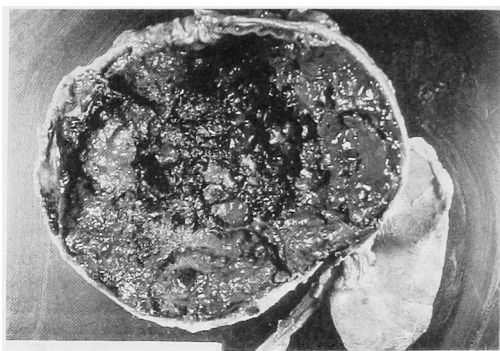


Fig. 3. Cut surface of the extirpated tumor. The tumor contains old clot and red-yellow colored fluid.

しており, 腫瘍と接した左腎上極付近は線維性の癒着が強く剥離が困難であったため左腎, 副腎を含めて一塊としてこれを摘出した. 脾, 脾との癒着は認められなかった. 手術時間は5時間5分, 術中出血量は約250 ml であった.

摘出標本: $15.5 \times 15.0 \times 9.5$ cm, 楕円球形, 腎を含めた重量は 1,350 g. 弾性硬, 表面は平滑, 赤褐色調の腫瘍であった. 断面では内部に陳旧性の凝血塊と思われる泥状物と茶褐色の内溶液を多量に含み, 嚢胞壁は赤褐色調で硬く凹凸不整の肥厚を示していた (Fig. 3).

病理組織学的所見: 嚢胞壁は H-E 染色で硝子化を認める肥厚した線維成分から大部分構成されていた. Azan-Mallory 染色でも青染する線維成分を大部分に認めたが, 一部に赤染する平滑筋成分が断続的に残存した静脈壁の構造を呈していた (Fig. 4). 静脈との交通性は認めないが嚢胞壁に静脈壁構成成分を含んでいることより, 静脈が限局性瘤状に拡張したものと考え

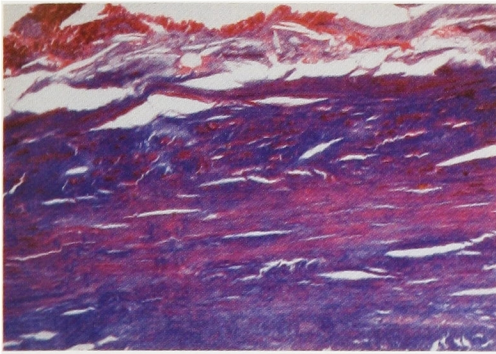


Fig. 4. Histological examination reveals that the tumor wall is composed of smooth muscle and elastic fibers. (Azan-Mallory staining)

られ病理学的に後腹膜に発生した venous aneurysm と診断された。

術後経過: 術後一過性の血清アミラーゼ値の上昇をみたが経過は順調で術後22日目に退院となった。

考 察

血液嚢胞という名称は頸部において「静脈が限局性瘤状拡張を示したもの」として1814年 Hey が初めて記載したとされ¹⁾, 本邦では1905年に小島²⁾ が左側頸部に発生した症例を報告したのが最初である。頸部に発生した血液嚢胞とは静脈と直接交通して流動性静脈血を内容とした嚢胞, あるいはすでに静脈との交通がなくなっているものの凝血塊, 変性血液成分を内容とした嚢胞とされている³⁾。その分類につき Spannaus⁴⁾ は以下の様に報告している。

1. 真性血液嚢胞: 静脈そのものの異常による

1) 胎生期の静脈形成不全によるもの

2) 出生後に静脈が瘤状拡張したもの

2. 非真性血液嚢胞: 上記以外

1) 鰓弓嚢胞より発生したもの

2) 血管腫より発生したもの

3) リンパ管腫より発生したもの

4) 胎生期リンパ節奇形より発生したもの

最近後腹膜における嚢胞性疾患で同様に血液嚢胞という名称で報告されている症例が散見されるが, これらは静脈が瘤状拡張を示したとされる頸部血液嚢胞ほど厳密に定義されたものではなく頸部発生例とは少し意味が異なる。もともと後腹膜血液嚢胞とは1895年 Narath ら⁵⁾が後腹膜嚢胞性疾患を 1)漿液性嚢胞, 2)皮様嚢胞, 3)血液嚢胞, 4)リンパまたは乳糜嚢胞, 5)包虫嚢胞の5つに分類して以来, 通常一般には内部に変性血液成分を含んだ嚢胞状疾患の総称として扱われ, 嚢胞壁の成分にはあまり注目されていない。そのため通常の嚢胞内に血液成分を含む症例から自験例のように嚢胞壁に静脈壁構成成分である平滑筋組織を有し頸部血液嚢胞の定義に合致するような症例まで各種の病態が単なる血液嚢胞という名称で報告されている。しかも自験例同様の嚢胞壁に平滑筋組織を含んでいる症例を血液嚢胞以外の名称で報告している例もあり統一をみない。そこで今回われわれは一般に後腹膜血液嚢胞とされているものの中から嚢胞壁に静脈壁構成成分である平滑筋組織を含むかどうか注目し, 自験例のごとく嚢胞壁に平滑筋組織を含んだ症例については静脈が限局性瘤状拡張を示したと考え venous aneurysm として集計した。後腹膜 venous aneurysm と考えられる症例は1991年前田ら⁶⁾ が集計した5例^{7,9)}に自験例を含めた3例^{10,11)}を追加すると過去に8例の報告がある (Table 1)。年齢は生後5ヵ月から

Table 1. 8 cases of retroperitoneal venous aneurysm reported in Japan.

症例 番号	報告者	年齢	性別	部位	主訴	腫瘍の大きさ	報告診断名	術前診断
1	山本 ⁷⁾	47歳	男	右腸骨窩	非還納性脱腸 右腸骨窩腫瘍	小児頭大	血液嚢胞	不明
2		34歳	男	右腸骨窩	下腹部腫瘍	小児手拳大	血液嚢胞	不明
3	井上 ⁸⁾	52歳	男	左腸骨窩	左下腹部腫瘍	鶏卵大	血液嚢胞	不明
4	安形 ⁹⁾	5ヶ月	男	左腎上方	腹部腫瘍	成人手拳大	血液嚢胞	後腹膜腫瘍
5	矢島 ¹⁰⁾	67歳	男	横行結腸右方	下腹部痛, 下痢	4×4 cm	静脈瘤	不明
6	前田 ⁶⁾	59歳	男	左腎上方	腹部腫瘍	10×10×13 cm 780 g	真性血液嚢胞 (venous aneurysm)	嚢胞性後腹膜腫瘍
7	Nakamura ¹¹⁾	50歳	男	左腎上方	顕微鏡的血尿	9×8.5×8.1 cm 400 g	varices	内分泌非活性副腎腫瘍 または後腹膜腫瘍
8	自験例	73歳	女	左腎上方	左腹部腫瘍	15.5×15.0×9.5 cm 1350 g	venous aneurysm	腎嚢胞

自験例の73歳まで、性別は自験例を除いて7例が男性であった。主訴に特異的なものはない。報告診断名については山本、井上、安形らは血液嚢胞、矢島らは静脈瘤、前田らは真性血液嚢胞 (venous aneurysm)、Nakamura らは varices としており統一していない。術前診断については安形らは後腹膜腫瘍、前田らは嚢胞性後腹膜腫瘍、Nakamura らは内分泌非活性副腎腫瘍もしくは後腹膜腫瘍としており、自験例は巨大な腎嚢胞と診断した。また仮性脾嚢胞や後腹膜平滑筋腫で自験例類似の画像の特徴をもつ症例^{12,13)}も報告されており、術前に venous aneurysm を予想することは非常に困難と考えられる。もともと摘除標本で病理組織学的に初めて診断がなされるべきものではあるが、後腹膜に嚢胞性腫瘤を認めた場合自験例のような症例も今後考慮する必要があると思われる。

一方通常の嚢胞内に血液成分を含んだもの、つまり嚢胞壁に平滑筋組織を含まないものとしては出血性嚢胞や encysted hematoma¹⁴⁾ などがある。これらと静脈の限局性瘤状拡張によるものとして今回 venous aneurysm として集計した症例とはその病態から明確に区別されるべきであり、またその鑑別は病理組織学的検索において可能となるであろう。

頸部血液嚢胞において静脈が拡張を示す成因として静脈壁の先天性素因説、静脈弁不全説、静脈壁病変説、血圧説、血管神経説などが推測されており³⁾、後腹膜発生についても同様に推測されるが詳細は不明である。自験例を含め今回 venous aneurysm として集計した8例とも嚢胞に交通する静脈が明確ではなく、いずれの静脈から発生したのかは不明であった。また静脈に異常をきたす可能性のある門脈圧亢進症等々の病態を有した症例もなかった。

今回われわれは後腹膜 venous aneurysm として集計検討したが、今後自験例同様の症例には嚢胞壁の病理組織学的検討により本症に統一した名称を用いることを提唱するとともに、その報告例が増加し発生原因や臨床の特徴について検討が加えられることを期待したい。

結 語

73歳女性の後腹膜 venous aneurysm の1例を報

告した。自験例を含め過去の後腹膜血液嚢胞本邦報告例から venous aneurysm と考えられる8例につき検討を加えた。

本論文の要旨は第137回日本泌尿器科学会関西地方会で発表した。

文 献

- 1) 村上国男, 上野 明, 菱田泰治, ほか: 頸部血液嚢胞新分類法の提唱. 外科 28: 163-169, 1966
- 2) 小島浦三郎: 先天性血液嚢腫ノ一例. 医学中央雑誌 2: 1346, 1905
- 3) 児島 保: 頸部血液嚢胞の1例. 外科の領域 7: 1228-1231, 1959
- 4) Spannaus K: Blutcysten des Halses. Klin Khir 63: 290-306, 1909
- 5) 大井鉄太郎, 松岡敏彦, 鈴木三郎, ほか: 後腹膜嚢腫の1例および本邦後腹膜嚢腫の統計的観察. 臨泌 28: 521-527, 1974
- 6) 前田真一, 玉木正義, 山本直樹, ほか: 後腹膜真性血液嚢胞の1例. 泌尿紀要 37: 51-54, 1991
- 7) 山本耕橘: 組織学所見ヲ基礎トセル血液嚢腫ノ本態並ニ発生学上ノ知見ニ就テ. 日外会誌 19: 265-284, 1918
- 8) 安形 篤, 野沢真澄, 板谷博之: 乳児にみられた後腹膜血液嚢胞の1例. 日外会誌 71: 380-381, 1970
- 9) 井上久孝: 後腹膜血液嚢腫の1例. 日外会誌 59: 685, 1958
- 10) 矢島俊巳, 川村一彦, 吉森 勝, ほか: 後腹膜に発生した孤立性静脈瘤の1治験例. 日臨外医会誌 46: 1417, 1985
- 11) Nakamura T, Wakisaka M, Ohkubo H, et al.: A case of solitary varices arising from the retroperitoneum. Urol Int 47: 90-93, 1991
- 12) 三浦一陽, 川原昌巳, 白井将文, ほか: 腎嚢胞と誤診した脾仮性嚢胞. 42: 1116-1119, 1988
- 13) 矢野真治郎, 森久清志, 荒川昭彦, ほか: 後腹膜平滑筋腫の1例. 西泌尿 53: 1153-1157, 1991
- 14) Leake R and Wayman TB: Retroperitoneal encysted hematoma. J Urol 68: 69-73, 1952

(Received on February 5, 1992)
(Accepted on March 16, 1992)